



Title	「おまへのやっているのは哲学だ／おまえには哲学がない」
Author(s)	池田, 清彦
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 99-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81719
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「おまえのやっているのは哲学だ／おまえには哲学がない」

池田清彦

*「おまえのやっているのは哲学だ」

私は構造主義生物学というものをやっていますが、これは何ら実証性のない学問と受け取られ、以前はフーコーやソシュールの言語論なんかを読んでいたこともあって、「おまえのやっていることは科学ではなくて哲学だ」とよく言われました。

科学と哲学ということに関しては、実証性がないことが「哲学」と呼ばれる以外に、科学の前提を認めない、あるいはそれを疑うこともまた「哲学」と言われます。科学というものは、「パラダイム」という言葉があるように、前提ややり方が整合的に決められていて、それに従わないことにはそもそも論文が書けません。哲学の論文の場合は論文を書く経緯を必ず書くのに対し、科学の論文の場合は前提をことさら書かないし、前提を疑わずに、あるやり方に従って書くのです。そこには必ず「レフリー」というものがいて、前提をはずれてしまうと、論文が正しいのか正しくないのかにかかわらず却下されてしまうのです。だから前提を疑うこと＝「哲学」というわけです。

*「おまえには哲学がない」

また私はいま大学の評議員というものをやらされているのですが、私は大学の将来などに関心のないものですから、学長たちから「おまえには哲学がない」とよく言われます。彼らの言う哲学とは察するに大学の将来像、行動の指針を考えると、その場合、哲学とは世界観のようなものとして考えられているようです。でも哲学とは世界観なのでしょうか。

*「風邪をひいても世界観がかわる。だから世界観は風邪の症状だ。」——チエーホフ

世界観などというものは薬を飲んだら変わってしまいます。世界観は脳内の麻薬の分泌状態に対応させられるかもしれません。ともかく人間の頭はある程度物質にコントロールされています。しかしそれはある幅を超えてはコントロールできません。私に興味があるのはそれがどの程度コントロールされるのか、です。例えばカミキリムシなどは、行動パターンというものに幅がありません。インプットとアウトプットとが直結していて、外からの刺激がそのままそのまま筋肉系に伝わり、行動として現れるわけです。

それに対し、人間はインプットされたものをすぐさまアウトプットにもっていかずにまず脳にそれを送るので、そのまま行動に出さない。脳の中でいろいろ考える。誰一人として同じことを考えてはいないのです。「哲学がある」とは、生物学的に見れば、考えるやり方、行動パターンに多様性があることを意味するのだといえます。その意味では虫には哲学がないといえるのです。

*「すべてのH₂Oは同じである」？

ところで、人間のすべての考えの根底には同一性というものがあると私は考えます。言語にも何らかの同一性が常に隠れており、同一性を見出さなければ外の世界を認識できないということは人間の生物学的宿命であるといえるかもしれません。私が思うに、あらゆる同一性の根源は「私は私である」という私の同一性にあるのではないのでしょうか。私の身体をなす物質は常に入れ替わっていて同一ではなく、私の同一性というものは科学的にはナンセンスであるわけです。でも科学というものもまた同一性によって思考しているのです。

私は世界は無常であると思っています。無常な世界のなかに何らかの同一性があるかどうかは誰も分からないのです。科学は世界を認識するときに法則と物質という二つの同一性を指定します。法則の同一性については不変 (invariant) かつ普遍 (universal) であることが前提され、他方H₂Oなどの物質については個でありしかも普遍であるといわれます。このように言葉と外部世界とが一対一対応させられた科学においては、曖昧さというものがなくされたうえで同一性が決定され、物質は誰にとっても同じものとみなされるわけです。誰にとっても同じになれば哲学は必要なくなるので、科学と哲学はここで別々のものになるわけです。

しかし、物質が個であり普遍であるということを誰も証明していないのです。ライブニッツなどは人間の五感で感じた個物はすべて違うと言います。自分の目で見たものはどれも違うものなのです。科学がすべての H_2O が同じだというのはだれも自分の目で H_2O を見たことがないからです。科学的な物質は「装置」を介して観察されますが、装置というものはそもそも H_2O 分子がすべて同じであるという前提で作られている。私は H_2O が実在するということを信じないわけではないのですが、でもすべての原子や分子が同じであるとは信じられないのです。もしかすると原子は一つずつ違うかもしれない。すべての原子は同じである、とは現代科学の前提であって誰もそれを疑わないだけなのです。いわば皆同じ形式を信じていて、そのなかで理論の違いを論じているわけです。

*「形式より内容の方が重要だ」？

近頃会議などで「形式より内容の方が重要だ」などと言われますが、私は逆に内容などどうでもよくて、形式こそが重要だと考えます。近代以後、世界は形式より内容を重視するようになってきました。身分制がなくなり、形式の平準化が起こったのです。するとすべてのひとが同じ形式を信じていて、内容だけが違うことになります。例えば私が人を好きになるときは、私が誰のことを好きになるのかが重要なのです。

しかし中世ヨーロッパでは人を愛するということが病気であると考えられており、誰を愛するかということとは関係なしに、人を愛するという形式をもつこと自体が問題であったのです。実はこの背景には中世では身分の違う人々は違った形式をとっているという前提があるのです。文化の違いというのは実に形式の違いなのです。近頃、多様性が大事だと声高に言われますが、同じ形式のなかでの多様性を語ってもしかたのないことで、形式の違う多様性を考える必要があると私は思います。

哲学の現場というものを考えてみると、ある人がこういうことを言った、別の人がああいうことを言ったという議論は、結局のところ一般の枠組みの中で内容がどう違うかということになり、現場では面白くなく、むしろ、私がおそらくの行動を起こすにあたってその行動の依って立つ規範を人に分かるように説明しなければならないときに、自分のもちいる理屈が誰の形式と同じか同じで

ないかということが問題になるのではないかと思います。

***「物質は不滅である」か？**

先ほど生と死のお話がありましたが、生と死を区別するというのもまた同一性を前提しています。でもそもそも世界が無常であるとすればこのような区別ができるかどうかは分からないのです。なのに同一性が存在すると信じて世界にこのような区別を持ち込む根拠となっているのは、やはり同一性は私は私であるという同一性のアナロジーなのです。時間が均一に流れるということもまたこのアナロジーによって考えられているのだと思います。

結局人間は自分の考えにしたがって世界を理解し、自分の考えたように世界が動いていると思ってしまうわけですが、科学も同じで、科学もまた人間の認知に整合的にしか物事を観察できないのです。実証とはいうものの、実験によってあたかも世界が理論に整合的であるかのように見えてしまうのです。

熊野さんのお話に出てきた「物質は不滅だ」ということも本当は疑わしいわけです。最近の大統一理論などは陽子がいつか崩壊するということを説いているのです。またその一方でこうした大統一理論や超ひも理論などの現代物理学は実証が極めて困難であり、もはや論理整合性のみが問題になるわけですから、その意味では哲学と変わりがないといえるのかもしれません。

（記録：本間直樹）